

## おわりに

本書を通してのメッセージとして

- 原著論文は臨床ありきであり、臨床現場での経験が大事
- 原著論文はパズルのピースに過ぎないので結果に飛びつかない
- 専門家が査読で質を担保してくれているので自分のレベルに合わせて気楽に読めばいい
- 批判的吟味とは粗探しではない

といった点があったのはお気付きでしょうか。みなさんのなかにはもしかしたら以下のような意見を見聞きして、これらの点をすべて考えないといけないという思い込みがあるかもしれません。

- 主要誌に掲載された論文だからといって無条件に信用していいわけではない
- エビデンスに基づいた治療を行うには原著論文を批判的に吟味する必要がある
- バイアスを考えないで結果を解釈するのは危険
- 論文を読むためのガイドラインやチェックリストに沿った方がいい
- 製薬企業からお金をもらっているから結果は信用できない

もっともな意見ですが、でも毎回徹底的に吟味しようとする多くの人が脱落して論文を読むのが嫌になると思います。本書ではこれらの視点は大事としつつも、「どこまで読めればいいのか？」を示したつもりです。とはいえ、本書に書かれている内容が「言い過ぎでは」「簡略化しすぎて逆によくない」という各専門家からの批判を免れないだろうという点には腐心し、できるだけ誤解を生まないよう意識しました。

本文でも記載したように僕自身はそもそも原著論文1本の結果を臨床に反映させようとはあまり思いません。臨床のターニングポイントとなるような研究というのは存在しますが、必ず類似の追試で同じような結果になるか検証されますから、それを待っても遅くないと思います。

個人的な意見ですが、自分で臨床研究論文を書いている人ほど、論文に対していい意味での「曖昧さ」や「割り切り」をもっているように思います。何本も論文を出版するなかで、研究の大変さや不完全さ、査読システムの限界や不透明さ、主要誌に論文が掲載されることの難しさを知っているからこそ、研究論文を過剰に信用することもなければ逆に過剰な粗探しもしないように思います。原著論文を読んで積極的に臨床に応用するというよりも「そうかもしれないし、そうじゃないかもね」くらいな印象で、むしろ論文の面白さを見ているようにも思います。臨床や研究を真剣にやっていたら「あ、この研究は面白いから読んでみよう」と思うときがあるはずで、そこから知的好奇心が広がり、研究の道に続き、医療が進歩していきます。

だから最初は身構えず気楽に原著論文を読んでほしいと思います。そして臨床を行っていくなかで、面白いと思えるような病態・研究に出会い、さらなる科学的知見を積み上げたいと思ってもらえたら嬉しいです。また研究に興味がなくとも自分の診療の見直しとして、改めてどのような根拠があるのか原著論文を読んでみることで、自分の行っている治療・医学的なアドバイスに少し自信がもてるようになるかもしれません。

本書で説明していることは臨床研究の表面的なことであり、世の中には臨床研究に対して真摯に向き合っている先生がたくさんいます。本書をここまで読んだのであれば、ぜひ他の本も手にとって、「みんな同じことを言っているな」「これに関しては意見が割れているな」というのを実感し、自分で学んで判断してほしいと思います。

本書を執筆するにあたり非常に多くの先生のご協力をいただきました。特にメンターであり本書を監修していただいたマサチューセッツ総合病院救急部の長谷川耕平先生はじめ、内容や構成に関して相談に乗っていただいた以下の先生のお力なくして本書は世に出ませんでした。心より感謝申し上げます。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校公衆衛生大学院 / 国立成育医療研究センター社会  
医学研究部 大久保祐輔先生

マサチューセッツ総合病院救急部 未田善彦先生

マサチューセッツ総合病院救急部 藤雄木亨真先生

東京大学医学部附属病院救急部・集中治療部 大沢樹輝先生

また本書の可読性に関して確認していただいたライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボンの杉浦淳史先生とTXP Researchのメンバーのみなさま、僕の自由な活動を許容していただいているTXP Medical株式会社の園生智弘CEO、福井大学医学部附属病院救急部の林寛之教授ならびに各先生方、それから東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻臨床疫学経済学講座の康永秀生教授にこの場を借りて御礼申し上げます。

そして出版社である羊土社の方々には本当にご迷惑をおかけしました。元々は5年ほど前にレジデントノートで連載をいただいたときの企画でしたが、自分の勉強不足もあり、出版までに時間を要してしまいました。特に吉川竜文様、伊藤駿様、保坂早苗様、そして素敵なイラストを描いてくださった森マサコ様には心より御礼申し上げます。

当然ですが本書の内容はすべて著者である後藤に責任があります。もし内容に誤りがあった場合の責任は上記の先生方ではなく、著者にあることをここに明記しておきます。

最後にいつも僕のがまに付き合ってくれている妻と大切な3人の子どもたちに感謝します。

2021年  
後藤匡啓